

着々と工事進行中の

東京港修築の威力

東京市技師 田村 興吉

明治十年代からの噂であつた東京築港も、今日では隅田川口改良工事の名の下に着々修築の歩調が進められつゝある。昭和二年一ヶ年間に芝浦地先き月島三號地下流、砲臺迄の間に於て荷役された本船丈けでも既に總噸數 2 百 83 萬 4 千 2 百 70 噸 (300 噸以下の小船を除外し) に上ほり、是れに三號地上流永代橋迄の港域に於て荷役せる 1000 噸以下の小蒸汽船及帆船の總噸數 33 萬 6 千 9 百 64 噸を加ふるならば、此二區間に於て荷役する本船が既に其總噸數 3 百 17 萬 1 千 2 百 34 噸の多數に上ほり統計上の誤差もあろうが大正十四年度内務省發刊の港灣統計に計上された東京港入港船舶總噸數 141 萬 501 噸の二、二倍、又昭和元年度東京港入港船舶總噸數の約二倍強である。是れが如實に復興の東京市及び東京港修築工事の顯著なる進展を同時に物語る好資料ではないか。

東京市は勿論財政上から言ふならば餘り餘裕のある所帶でないことは既に周知のことであるが、さらばさて四百萬に餘る本市内並に郊外居住者が臨海の大都市に居ながら單に築港なき爲め年々蒙る數千萬圓の損害と不便を忍び且つ其産業的發展の阻害迄でも甘受し居る譯にはいかぬのだ、是等の關係を數字的に知るならば誰れでも此場合萬難を排し東京港の修築を急がねばならぬは當然の歸結である是れは議論でも推測でも宣傳でもない是迄出來た工事の結果として京濱貯賃を索制し新たに得た 2 百 83 萬噸の直接荷役により 1 千萬圓以上の實益が市民經濟を潤澤にしたのだ。

東京港の内容が日一日と備へられつゝあることは昨年の暮れ迄滿潮を利用するにあらざれば入港出來なかつた 1 千噸以上 2 千噸級の

船は今日では幅員 40 間深度最低干潮面以下 18 尺即ち平時 20 尺以上の航路及狹隘ではあるが日の出町前面海面には其繫泊所も出來、今日では二六時中何時でも自由に出入出来るやうになつた、來年の今時分は航路の幅員は二倍になり繫泊所の面積も二倍以上となり又今盛んに製作の上芝浦町一丁目地先に沈降しつゝあるケーソンも儀裝を整ひ 6000 噸級船舶繫泊川岸壁として其雄姿を水上に出顯し東京港の威容に數段の光採を與ふることであらう、今東京市が隅田川口改良工事に使用しつゝある是等工事用主力船舶を表示すれば次表の如し

表中には随分船齡の老けたものもあるが是等は全部最近改造し新しき武器として働き得るやう骨組から改められたものだ、此の諸船舶の購入原價丈けでも 3 百 8 萬 5 千餘圓では是れに舊船の改造工費を加ふればその投資額約 4 百萬圓、此外混凝土兩塊の製作所設備約 30 萬圓船舶機修理工場設備約 15 萬圓に達する繰り返して言ふならば現在の出來形は永い間の捨石と現行の設備、船舶、器具、機械運轉の賜物であるのだ、そして是等のものは決して一朝一夕に求むるこの出來ぬ所のもので東京港を築き上げる實際上的威力である、昭和二年度一ヶ年に於ける航路、船溜の浚渫せる土量は實に 45 萬立坪、埋立せるもの又同量で昭和三年に於ける豫定土量は浚渫も埋立も各 50 萬立坪に達するであらう。

隅田川口改良工事の要旨

工事費 1 千 9 百萬圓。工期 大正十一年度乃至昭和六年度。

浚渫土量 2 百 49 萬餘立坪。埋立地面積 2 百 6 萬坪。

假防波堤 1 千 4 百 40 間。荷役能力 一ヶ年